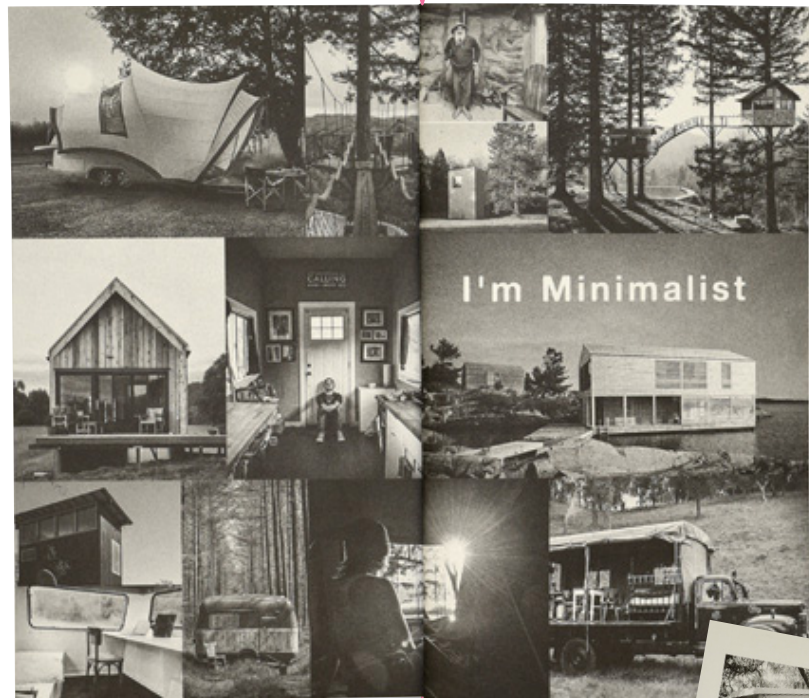


# リトルプレスから 始まる旅

文●根木慶太郎

volume 47

## ミニマリズムの進化系。



今回紹介するリトルプレスは、『月極本1 ニューミニマル』。  
僕の手元に『週刊本17 磯崎新 ポスト・モダン 原論』という本がある。今から31年前、1985年に発行された書籍。  
ペーパーバックのような装丁は、表紙のみがカラー印刷され、紙質や印刷もシンプルで廉価な形態をとっていた。『月極本』はこの『週刊本』と版型と装丁をほぼ同じにしてつくられている。  
『週刊本』が刊行されていた頃、建築の世界ではポスト・モダンブームとなり、モダニストであったはずの磯崎新の「つくばセンタービル」(1983年竣工)が彼の転向の象徴となり、日本の建築界のみならず、世界に衝撃を与えた。

当時、デザインや文学、現代思想の世界で話題になっていたテーマをもとに編集されていた『週刊本』が選んだひとつが、磯崎新のポスト・モダン原論だった。  
ポスト・モダンの建築は、ミニマリズムの建築において装飾が排除されたことによって、形態に意味を見ることが難しく、退屈な建築になってしまったことを批判し、建築における新たな装飾や人間性

今月のおすすめリトルプレス

### 『月極本1 ニューミニマル』



世界のおきな住まい方をテーマにしたリトルプレス。

監修: YADOKARI  
企画・編集: 宮下哲  
2015年11月、YADOKARI刊  
173×108ミリ(157ページ) 1944円

この記事が面白い!  
森で、湖で、街で、新たなミニマルの世界が広がっている。

の復活を標榜した次世代を担うはずの建築様式だった。  
モダニズムの標語としての「レス・イズ・モア(より少ないことが、より豊かなことである)」に対して、ポスト・モダンでは「レス・イズ・ポア(少ないことは退屈なこと)」と揶揄され、モダニズムの考え方を示すミニマリズムは過去のものとしてさげられていた。  
現在のミニマムを標榜する「YADOKARI」が、古本屋で見つけた『週刊本』をきっかけにつくられた『月極本』。  
「未来住まい方会議」で公開している世界中のおきな住まい方、2000事例の中から選んだ50事例が、今回は掲載されている。  
契約金2億円のメジャーリーガーの家はレトロなワーゲンバス。

ポール・スミスが求めた休息小屋。究極のミニマルハウスは17平方メートルの倉庫。1坪あれば暮らしやすい。素朴で器用、3日で建ち3つの顔を持つ家。美しい湖上に佇む小さなポートハウス。ミニマリズム建築の伝説、中銀カプセルタワービルの一室を改造して、ミニマルなオフィスを作る。  
『週刊本』で31年前、批判の対象とされたミニマリズムが、『月極本』ではニューミニマルとなり、新たな価値を持った。  
かつてモダニズムの時代、機能と形態を主に示していたミニマルが、経済(お金のこと)、生活(暮らし)、社会や自然との関係性により、新たな価値をもって再び、次の時代に繋がっていくことを『月極本』は示しているのかもしれない。



### 『月極本1 ニューミニマル』編集長から一言

『週刊本』が創刊された80年代当時と今とでは、メディア環境も社会的背景も全然違う。でも、そのミニマルな装丁と時代とリンクした内容は今見ても斬新で魅力的でした。『月極本』は、『週刊本』のように、30年後も色褪せず読み継がれるコアな出版物でありたいと思います。

